



A4用紙で印刷すると、実寸サイズがご確認いただけます。
※倍率100%の場合

うとうととして目がさめると女はいつのまにか、隣のじいさんと話を始めている。このじいさんはたしかに前の前の駅から乗りたいなか者である。発車まぎわに頓狂な声を出して駆け込んで来て、いきなり肌をぬいだと思ったら背中にお灸のあとがいっぱいあつたので、三四郎の記憶に残っている。じいさんが汗をふいて、肌を入れて、女の隣に腰をかけたまでよく注意して見ていたくらいである。

女とは京都からの相乗りである。乗った時から三四郎の目についていた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移つて、だんだん京大阪へ近づいて来るうちに、女の色が次第に白くなるのでいつのまにか故郷を遠のくような哀れを感じていた。それでこの女が車室にはいつて来た時は、なんとなく異性の味方を

得た心持ちがした。この女の色はじつさい九州色であつた。

三輪田のお光さんと同じ色である。国を立つまぎわまでは、お光さんは、うるさい女であつた。そばを離れるのが大いにありがたかつた。けれども、こうしてみると、お光さんのようなのもけつして悪くはない。

ただ顔だちからいうと、この女のほうがよほど上等である。口に締まりがある。目がはつきりしている。額がお光さんのようにだだっ広くない。なんとなくいい心持ちにできあがつている。それで三四郎は五分に一度ぐらいは目を上げて女の方を見ていた。時々女と自分の目がゆきあたることもあつた。じいさんが女の隣へ腰をかけた時などは、もつとも注意して、できるだけ長いあいだ、女の様子を見ていた。その時女はにこりと笑つて、さあおかけと言つてじいさんに席を譲つていた。それからしばらくして、三四郎は眠くなつて寝てしまつたのである。

その寝ているあいだに女とじいさんは懇意になつて話を始めたものとみえる。

目をあけた三四郎は黙つて二人の話を聞いていた。女はこんなことを言う。――
 子供の玩具おもちゃはやつぱり広島より京都のほうが安くつていいものがある。京都
 でちよつと用があつて降りたついでに、蝟薬師たこやくしのそばで玩具を買つて来た。久
 しぶりて国へ帰つて子供に会うのはうれしい。しかし夫の仕送りがとぎれて、
 しかたなしに親の里へ帰るのだから心配だ。夫は呉くれにいて長らく海軍の職工を
 していたが戦争中は旅順りょじゆんの方に行つていた。戦争が済んでからいつたん帰つて
 来た。まもなくあつちのほうに金がもうかるといつて、また大連たいれんへ出かせぎに
 行つた。はじめのうちは音信たよりもあり、月々のものもちやんちやんと送つてきた
 からよかつたが、この半年ばかり前から手紙も金もまるでも来なくなつてしまつ
 た。不実な性質たちではないから、大丈夫だいじゆうだけれども、いつまでも遊んで食べてい
 るわけにはゆかないので、安否のわかるまではしかたがないから、里へ帰つて
 待つてゐるつもりだ。

じいさんは蝟薬師も知らず、玩具にも興味がないとみえて、はじめのうちは
 ただはいはいと返事だけしていたが、旅順以後急に同情を催して、それは大い
 に気の毒だと言いだした。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとうあつち
 で死んでしまった。いったい戦争はなんのためにするものだからわからない。あ
 とで景気でもよくなればだが、大事な子は殺される、物価しよしきは高くなる。こんな
 ばかげたものはない。世のいい時分に出かせぎなどというものはなかった。み
 んな戦争のおかげだ。なにしろ信心しんじんが大切だ。生きて働いているに違いない。
 もう少し待つていればきつと帰つて来る。――じいさんはこんな事を言つて、
 しきりに女を慰めていた。やがて汽車がとまったら、ではお大事にと、女に
 挨拶あいさつをして元気よく出て行つた。

じいさんに続いて降りた者が四人ほどあつたが、入れ代つて、乗つたのはた
 った一人ひとりしかない。もとから込み合つた客車でもなかつたのが、急に寂しくな
 った。日の暮れたせいかもしれない。駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯ひ
 のついたランプをさしこんでゆく。三四郎は思い出したように前の停車場ステーションで買

った弁当を食いだした。

車が動きだして二分もたつたらうと思うころ、例の女はすうと立って三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。この時女の帯の色がはじめて三四郎の目にはいった。三四郎は鮎あゆの煮びたしの頭をくわえたまま女の後姿を見送っていた。便所に行つたんだなと思ひながらしきりに食つている。

女はやがて帰つて来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもうしまいがけである。下を向いて一生懸命に箸はしを突つ込んで二口三口ほおぼつたが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思つて、ひよいと目を上げて見るとやっぱり正面に立っていた。しかし三四郎が目を上げると同時に女は動きだした。ただ三四郎の横を通つて、自分の座へ帰るべきところを、すぐと前へ来て、からだを横へ向けて、窓から首を出して、静かに外をながめだした。風が強くあたつて、鬢びんがふわふわするところが三四郎の目にはいった。この時三四郎はからになった弁当の折おりを力いっぱいに窓からほうり出した。女の窓と三

四郎の窓は一軒おきの隣であつた。風に逆らつてなげた折の蓋ふたが白く舞いもどつたように見えた時、三四郎はとんだことをしたのかと気がついて、ふと女の顔を見た。顔はあいにく列車の外に出ていた。けれども、女は静かに首を引つ込めて更紗さらさのハンケチで額のところを丁寧にふき始めた。三四郎はともかくもあやまるほうが安全だと考えた。

「ごめんなさい」と言つた。

女は「いいえ」と答えた。まだ顔をふいている。三四郎はしかたなしに黙つてしまった。女も黙つてしまった。そうしてまた首を窓から出した。三、四人の乗客は暗いランプの下で、みんな寝ぼけた顔をしている。口をきいている者はだれもない。汽車だけがすさまじい音をたてて行く。三四郎は目を眠つた。

しばらくすると「名古屋はもうじきでしょうか」と言う女の声があった。見るといつのまにか向き直つて、及び腰になつて、顔を三四郎のそばまでもつて来ている。三四郎は驚いた。